

“Heart to Heart”

第1巻 第3号

発行日 平成19年1月29日

目次:

多くの眼で子どもの支援を 1

コラム：安心して
ひとりになれるところ 2

療育プログラムのようす 2

コラム：療育に思う 2

多くの眼で子どもの支援を

2007年が明けました。日本は欧米に比べ新年に意義を重くおいていて正月という行事があるわけですが、私たちにおいてはやはり新しい年の訪れは前年のもろもろのことを洗い流し、清々しい出発の気持ちにさせてくれます。

昨年は、武蔵野東教育センターとしての新たな立ち上げの年でした。2月の北原記念館への引越しを皮切りに、4月からは本格的に始動しましたが、会員に登録して下さった方、そしてさまざまな形で当教育センターを利用していただいた方々には、この場を借りて厚く感謝申し上げます。療育プログラムを受講している方の場合はまだ3月まで今年度のプログラムが続きますが、お子様にはそれぞれ成長が見られ、保護者の皆様もお子様成長していく姿から家庭教育に対する張り合いを感じ、ご家庭でも努力されている方が多くいらっしゃるようです。

また同時に保護者の方からは、地域の幼稚園や学校における教育の様子が、断片的にはありますがリアルな姿をもって伝わってきます。発達障害の子どもたちは環境の違いによって示す行動や状態が一樣ではありません。

武蔵野東教育センターが週に一度あるいは月に一度という不規則な療育環境にあ

りながら、子どもの発達を促すことの十分に可能な環境であり療育の場であることを確認できたことは、私どもにとって大きな収穫でありました。

今年の4月からは北原記念館での二年目に入りますが、今年は、とくに子どもたちの教育的母体であるそれぞれの地域の幼稚園や学校と情報交換をするなど、連携を広げていきたいと思えます。現在でも、当教育センターでの療育プログラムの受講を出席扱いに認めたり、担任の先生が教育センターでの子どもの療育の様子を見学しに来たりする学校が増えてきています。このような連携交流がさらに広がっていくことは、環境によって違う姿を見せる子どもの側面を互いにより深く理解し、一人のお子さんの成長を多くの眼で支援していくことにつながるものと思えます。

長内博雄（武蔵野東教育センター所長）



安心してひとりになれるところ

副島 洋明 (副島弁護士事務所)

もう少し大人になれよ。ノ事件をおこしたこの人たちにそんな思いにさせられることはしばしばです。そんなことはせんないことだとわかっていますが、正直、そういいたくもなることがあります。

確かに、他人の顔や場を読めず、誤解を与え、不快・不安にさせ、いらぬ緊張とリアクションをつくり、それが事件の背景となっていますが、し

かし、それでもこの人たちは精一杯、社会(他人)に折り合おうと我慢努力して、ヤバイところから身を避け、怖い人には背をかがめてやってきます。この世の中、長いものには巻かれて、強いものには逆らわずにやっていかないといけないんだと教えられ、わかったつもりですが、それがどうも失敗してしまいます。いつもいつも緊張してアンテナを

はりめぐらせていると、ストレスもたまり、時には疲れていやになることだってあるんじゃないでしょうか。そんなとき、ひとりになれる、いつでも逃げ込めていつまでもひきこもって気持ちの整理をつけられる、そんなところがつけれないだろうか。



このコラムは4回シリーズでお届けしています。

療育プログラムのようす(各種教室)

コンピュータ教室開始

昨年9月より、小学校4年生から6年生を対象としたコンピュータ教室が開講しました。教室でのねらいは、コンピュータを使った活動をとおして学習姿勢や仲間意識を培うところにあります。学力や技能は、基本的な学習態度が身につくこと蓄積し発揮されるものです。技能面では、ローマ字入力によるタイピングの指導を重点としています。タイピングの技術が身につくと、コンピュータの実用度がぐっと増し生涯使える生活のツールになってくれることでしょう。教室では、ゲーム感覚で学べるタイピングソフトを使用し、家庭で練習するためのトレーニングメニューも組んでいます。昨年暮れにはオリジナル年賀状の作成、今は「Yahooきっず」を使ってのインターネット体験を楽しんでいます。技能学習の合間には毎回レリエーションの時間を設けています。プレイルームでのビーチボールバレーでは、頭のリフレッシュだけでなく、サーブの順番やルールの理解、また失敗や負けを受け入れる気持ちなど社会性の学習も兼ねています。ミッキーチーム対ドンキーチームの熱戦は、現在ミッキーチームが連勝中。がんばれドンキー!



体育教室のようす

体育教室では、持久走を始め、ホッピング、自転車、ボール、鉄棒、ローラースケート、縄跳びなど、様々な体育器具を使用して運動してきました。始めたころは、なかなか長く続けられなかった持久走も、今ではしっかり列を守って走ることができるようになりました。また、現在行っている縄跳びでは「かかとをつかないでジャンプする」など、身体の細かい部位を意識しての運動ができるようになってきました。いろいろな運動を通して身体を動かす楽しさを知ることはもちろんですが、精神的にもたくましく成長することもこの教室の目標のひとつです。年間30回の教室の中で、運動だけではなく、たくさんのかたを体験し学び、ひとりひとりが成長してきています。今年度もあとわずか、子どもたちと一緒に汗を流して楽しい時間を過ごしていきたいと思ひます。



療育に思う <コラム Mr. Tのつぶやき>



姉妹校のあるボストンへの出張の折、朝食時にコーヒースタンドで並んでいたときのことである。聞くとともに前の女性の注文が耳に入った。店員にみじかく自分のからだの事情を説明しつつ、「コーヒーのミルクは社製の豆乳にできますか」とその女性。私は、「どんな事情があるか分からないが、メニューにもないしそこまではどうだろうか」と心の中でつぶやいた。ところが、店員は女性の説明に深く頷くと、わざわざ

ざ別販売用の豆乳を開封し通常のミルクのかわりとして快く提供(無料)したのだ。些細なことかも知れないが、個を尊重する心得が日常生活にごく自然に反影されていることを感じた。前述の心境を「事情によっては、メニューにはなくてもできるかぎりニーズにこたえてあげられたらどうだろうか」とつぶやき直してみる。なんだか、これからの特別支援教育に求められる真理が見えた気がした。